

## 講演「マザー・テレサの活動とは」

講師：伊藤 高章（上智大学神学部教授）

〔記録作成：松岡敬興〕

◆  
マザー・テレサが道德の教材になっているというお話を松岡先生から伺いました。これは、恐らく文科省的に言う使いやすい教材なんだろうと思います。ノーベル平和賞をとったし、それからみんな知っているし、やっていることが「死を待つ人々の家」という、路上で誰にも看取られずに死んでいく人達と一緒に集めて、その人達に最後のケアをするという、ある意味、人道的に文句ないことをやっていますので、そこから色んなことが学べるだろうという、もちろん言うまでもないことなんですけれども。今日、松岡先生から言われましたのは「ちょっとその教材の厚みをつけてくれ」というお願いをされました。つまり、皆さんが「マザー・テレサ素晴らしい」と言うのも当然なことなわけですけれども、ちょっと下がって「一体何をしている人なんだろう。何を考えていた人なんだろう。そして、ここから何が学べるんだろう」ということを。教科書、それから教科書の指導書とはちょっと違った観点からお話をさせていただきたいと思っています。

◆  
ちょっと面倒くさい題をつけましたけども。「脱偶像化」。つまり、マザー・テレサって決まってるじゃないですか。インドに行くと、これくらいの、こけしみたいなのでマザー・テレサの人形が売ってるんですけれども、ちょっと偶像です。マザー・テレサっていうのは、ノーベル平和賞とったし、素晴らしいことをしている人で、だから、僕は逆手に取って、学生達を2月のボランティアプログラムに誘う時には、「おいおい。お前達10年たって子どもが幼稚園に行つて、ママ、大学の時に何やってたのって聞いたら、うん、ちょっとマザー・テレサの所でボランティアやったよって言

つたらカッコいいじゃない」と言うのと「そうだね」といって来たりするわけですが、やっぱりインドっていう国が持つ距離感と、そこでなんか素晴らしいことをやる。でも、そこでやることは僕達にとっても身近なことだということで、教材になりやすいというのは確かなんですけれども。小学生には、もちろんそんなに沢山のことが伝えられるわけじゃないし、複雑なことを提供するのが必ずしも教育的にいいとは思いませんけれども。教師の皆さんは、この教材がどれだけ厚みを持っているのかっていうのをぜひ知っておいていただきたいなあと思います。そういう意味で、何年もあちらに行く機会を与えられた。そして、マザー・テレサが作った死を待つ人の家というので、ボランティアなんかをずっとやってきた経験もありますので、少し、そんなことを皆さんにお話して。皆さんが教材を作る時の題材になればいいなあというふうに思っています。

最初の3枚のスライドでマザー・テレサの年譜というのが書いてあります。皆さん、どれくらいご存知かどうか分かりませんが、マザー・テレサっていうのは高校の教師でした。高校の教師であり、かつ校長までしていました。20年近く学校の教師をしていた人です。そういう意味でいうと。高校って言いますが、向こうは小学校から高校までずっと続いて、10年生の学校だったりするわけですが、ですから皆さんと、もしかしたら、とても立場の近い方だったかもしれない。となると、皆さんちょっと心を使っただけでいいなあと思うのは、カルカッタというふうな状況の中で、学校の教師ってどんな思いを持ってるんだろう、どんな課題を持ってるんだろう。そんな辺りから、このマザー・テレサという人に近づいていただければいいなあと思います。1910年に生まれてっていう辺りから始まって、1928

年に修道会。シスターになるわけですね。そのあとすぐインドに行って1929年から。ほんとに20歳そこそこから。19歳から教師をしたかっこうですね。20年間教師をしてた。その間に、1946年に暴動のためカルカッタの町は大混乱に陥るっていうことを経験して。「貧しい人々とともにいるキリストに尽くしなさい」というふうな。宗教者ですから、促しを受けて新しい活動を始めた。その結果、学校を飛び出して、路上で身寄りのなく死んでいく人達のケアをしたという話になるわけです。それが世界的に認められて1979年にはノーベル賞をとった。有名な話はノーベル賞の晩餐会。ついこの間もやっと思えますけど。「ノーベル賞の晩餐会は。私のために晩餐会をしないでください。そのお金を貧しい人達のために分けてください」と言った。恐らくディナーが出て、マザーはナイフとフォークの使い方をご存知なかったかもしれませんから、よかったのかもしれませんが。それで1977年。私が桃山に就職した年ですけども。この年に亡くなって。そのあと、学生達が毎年行っているマザーハウスという所に。石の棺の中にそのまま埋葬されています。こんなシスターがいらっしゃるわけなんですけれども。



実は今日の話ってすごく複雑なんです。どうしてかって言うと、大義名分はマザー・テレサという、小学校の道德の教材を厚みのあるものにするためのお勉強をしていただきましょうという流れが一つあるわけですけども。そのために、皆さんに今日、実際にインドに行った学生とディスカッションする時間をあとから取っていただくわけですけども。そうすると、大学生がマザー・テレサの所で体験学習をしたっていう成果を聞くわけですね。その背後に、松岡先生や僕が大学生をマザー・テレサの所に連れてって行く時の教材。それから、教育目標だとか教育方法っていうのがあるわけです。ですから、皆さん達は今日、三つのことに。あっちいたり、こっちいたり目を向けなくちゃいけ

ない。一つはマザー・テレサって教材がどれほど展開できるのかということ。それから、大学生としてマザー・テレサという教材を学んだ学生達の経験談。それから、実は今日これから僕がお話するのは、大学生をマザー・テレサに連れて行くという時に、マザー・テレサをどういうふうな教材として大学の教員が料理したのかって話なんです。

もちろん、小学校での教育のプロは皆さんです。僕は小学校の教育なんて怖くて絶対できない。ですから、「小学校のマザー・テレサの教材を使った道德教育は、こういうふうにするべきですよ」みたいなことなんて全然申せません。皆さんがプロ。僕はそれに関して全くの素人です。ですから、そんなだいそれた話はする気はないんですけども。でも、マザー・テレサという教材を皆さんが扱う時に参考になるかもしれない。マザー・テレサという人・活動の厚みを皆さんにお伝えすることはできるんじゃないかなあとと思います。その時に、ついでにマザー・テレサという教材を大学生に伝える時に、松岡や伊藤がどんなことをやっていたのかっていうタネ明かしをしたいと思います。学生さんは聞かないでください。

ちょっと難しい言い方をすると、大学における海外体験学習教材としてのマザー・テレサというのがあります。これを大学生に伝える時には、実はとっても難しい問題がいくつもありました。歴史的な問題だったり。マザー・テレサはカトリックのシスターですから、キリスト教の神学の問題。それから、海外体験学習理論みたいな問題。三つぐらいの大きなテーマを抱えながら、僕達は学生をインドへ連れて行っています。プラス、マザー・テレサの題材を扱っているとお土産が返ってくるんですね。そのお土産はどういうことかっていうと、マザー・テレサっていうのは残念ながら僕達の教材の中に留まってくれないんですね。マザー・テレサとの関わりを教材というステップを踏みながらでも関わりを持ちちゃうと、教師が問われてくる。「私を題材にしてもいいけども、あんたどうなんだい？」っていうふうな。教師のあり方。僕は大学の教師ですけども。恐らく、小学校の

教師である皆さんにもそうだと思うんですけども、マザー・テレサの活動そのものが持っている性格に近づけば近づく程、僕達が問われてきちゃうっていう。教師への語りかけっていうふうに、触れてきちゃうようになりますね。こんな話を今日、させていただきたいと思っています。

これ、マザー・テレサの所でボランティアするとくれるメダックって言うんですけど。なんとなく格好良いでしょ。だけど、一番最後のスライドにも同じのがあるんですけど。これ、1円玉みたいなニッケルでペラペラしてて、フツとやると飛んじゃうぐらいのちっぽけな安っぽいものなんですけれども。これだけがマザー・テレサの所でボランティアをした時に貰えるおみやげです。まさに1円玉をギョッと型に入れて潰したようなもの。それ1個。それ1個だけが、カルカッタでボランティアした時に貰えるおみやげです。他に何も貰えません。物としては、もちろん、お金も貰えませんし、交通費だって出してくれるわけではないし、食費もないし、泊まる所も提供してくれるわけではない。ただ、行くと、最初の登録の日にこれだけ貰えます。多くの学生達は、密かにネックレスとしてこれを付けて大学生生活を送ったりしてるんだと思います。



さっき、歴史のチャレンジ、キリスト教の神学のチャレンジ、教育理論のチャレンジという3つのお話をしました。それを順番にお話させていただきたいと思っています。マザー・テレサに限らないんですけども。徳川家康だって構わないし、リンカーンだって構わないんですけども。今の私達が子どもの道德教育の教材として、ある人物を取りあげるっていうのは、かなり危ない仕事です。どうしてかっていうと、今の私達の価値教育という視点から「マザー・テレサというのはこういう人だ」とか「こんなことをした人だ」とか「こんな意義がある人なんだ」というふうに意味付けしちゃうわけですよ。もちろん教材である以上、そういうふうな加工をする必要があるわけですけども。これって実は、道

徳教育にとっても害があることかもしれない。どういうことかという、ある生身の人。何年かの生涯を悩みながら苦悩しながら、または喜びや悲しみや、そういうものを経験して。80年なら80年過ごされた方を一つの型にはめてしまうというのは、私達が他者と向き合う時の姿勢として正しいんだろうか。もちろん、素晴らしいことをした人っていうふうに使わせていただくけれども。じゃあ、ほんとにノーベル平和賞をとるような活動をしたということだけで、その人を特徴付けていいんだろうか。これって、教材としてっていう言い訳がつくかもしれませんが。僕達にチャレンジとしてくるのは「他者をどうみるんですか」。例えば「この子はこういう人です」とか「この人はこういうことを成し遂げた人です」と言っていて、ある人にラベルを貼る。それが美しいラベルであったとしても、それが教育の現場でなされていいことなんだろうかっていう、とても大きな課題がやってくるんだと思います。

人間の現実を単純化して「マザー・テレサはこんな素晴らしいことをしたんですよ」というふうに教えることで、「こういうふうに生きなさい」という生きていく規範を与えることが、はたして道德教育の目的なんだろうか。むしろそうではなくて、「この人は色んなことをやった。こんな困難もあったし、あんな難しいこともあったし。うまくいかないこともあったし、失敗もあったし。こっちはほうでは全然評価されなかったし」というのが人間の生身のあり方じゃないですか。僕達は子どもと向き合ってる時。授業じゃない時に、子どもと向き合っている時に多様な子どもの面をなんとかして豊かに拾って行ってあげたい。一つの物差しで測るんじゃなくて沢山の物差しで。その子に最もふさわしい物差しで、その子を見てあげたいって思うわけですね。にも関わらず、教材としてとりあげた人を、ある一つの側面から、ある型にはめて、美化して語っていいんだろうかっていう、なんか問題が出てきちゃうのかもしれませんが。

それから、僕達が「マザー・テレサは素晴らしい」と言っていると、「はたしてカルカッタの人は、どうマザー・テレサを見

てるんだらうか」と考えたことありますか。今のカルカッタ市民の約3分の1はマザー・テレサ大嫌いです。これは向こうの実業家と何人かおしゃべりをして分かりました。どうしてかっていうと、「マザー・テレサは我々の町カルカッタが世界で一番酷い町だっていうふうに宣伝したから」。ノーベル賞の現場でも「カルカッタの悲惨な生活が」って言うわけですよ。カルカッタで生きている人達からみたら「なんで俺達の町がこんな悪く言われなくちゃいけないんだ」って思うわけですね。

◆

ですから、一面的にものを見る。それから、こっちの見たいようにものを見る、人を見る、歴史を見るっていうことは、歴史の研究としてはNGなんですよ。何か歴史上の出来事を見る時に一番大事なものは、当時の人達、当時の様々な利害を(持った)人達の眼差しから、この事がどういう意味を持ってたんだらうかっていう。多元的に見なくちゃいけない。それが、もしかしたら異文化理解とか他者理解っていうのの基本になっていくんだらうけれども。マザー・テレサに関してだけは額縁に入れて「これはこんな人です」っていう見方をしているのかっていうと、きっとそうではないだらうな。それがマザー・テレサという教育の難しさの一つ目です。だから、そういう意味でいうと、マザー・テレサの苦悩、マザー・テレサの失敗、マザー・テレサの先走り、マザー・テレサのみっともなさにも迫っていかないと。僕達は教材に向かった時に、人との関わり方を学ぶっていうことが、おろそかになってはいけないんだらうなと思うわけですね。

マザー・テレサは歴史の中では加害者側に立ってる人です。マザー・テレサの活動を必要とする現実があるわけですね。さっき、カルカッタの人達が「マザー・テレサはうちの町は酷い町だって世界中に宣伝した」って言っちゃう、そのカルカッタの町の現実っていうのはどうしてできたんでしょうか。大英帝国が支配していった時に、カルカッタは大

英領インドの首都でした。一時期はロンドンに次ぐ繁栄を誇っていた町です。今でも学生達は行ってますし。Google Earthか何かでカルカッタの町を上から見ると、真ん中にヴィクトリア・メモリアルっていう、ヴィクトリア女王を記念したバッキンガム宮殿みたいなのがあって。その真正面にすごく綺麗な教会があって。横っちょには競馬場があって、ゴルフ場があってっていうふうな構造をしています。本当に素晴らしい町だったはずなんです。でも、この町が1947年に独立する時に、イギリスがインドっていうのを独立させる時に分割統治をしようとしていますね。つまり、インドっていう国にはイスラームとヒンドゥーがすごく沢山混じっていたけれども。イスラーム教徒にパキスタンという国を作ってあげて、インドっていう国はヒンドゥーの国にしようっていうふうにしました。そうやって美味しいものを投げることで、独立させたあと旧宗主国のイギリスとも仲を良くさせようという策略をしていたわけですね。ガンディーはこれに反対していた。だから、ガンディーは最後までイギリスのインド独立のさせ方には抵抗していた人なんですけれどね。

さっき、年譜の一番下に1946年のカルカッタの暴動にふれたってありますけど。これはどういう暴動化っていうと。カルカッタのすぐ東側に当時の東パキスタンが。今はバングラデシュって言いますけど。バングラデシュとの国境があります。どういうことが起こったかっていうと。パキスタンをイスラームの国、インドをヒンドゥーの国にするっていう政策をイギリスが出しましたから、インドにいたイスラーム教徒が東パキスタン・バングラデシュに流れようとしたし、バングラデシュの領域にいたヒンドゥー達がインドへ戻ろうとして、民族大移動が起こったわけですね。

◆

その間に、すれ違いざまに、殴りあいをしたり殺し合いをしたりみたいなこともあったし。一番国境に近かった町がカルカッタですから。カルカッタっていうのが、その2つの勢力が交わり合う場所になってしまった。だから一気に、大

英帝国二番目の繁栄を誇った土地が混乱の頂点になるわけですね。1947年の8月15日という日にインドが独立するわけですが、間に合わなかった人が沢山います。それから、移動をしそこなっちゃって。土地は離れたけどうまくいかなかった人達とかみんないるんですけど、それが全部カルカッタに集まってきました。そういう人達が沢山集まったから、1947年以降カルカッタには、恐らく公式な人口の倍ぐらいはホームレスがいるわけですね。そのホームレスの人達は、インドのホームレスの人達を見ると分かりますけど、家族です。ですから、路上で次の世代が生まれて。また成長して路上の者達同士が。どれぐらい家族っていう、普通の婚姻計画を持っているか分かりませんが、とにかく子どもが生まれて。だから、路上で生まれた路上生活者が、もう3世代いるわけなんです。もちろん、その人達は戸籍も何もないわけですね。マザー・テレサは、そういう人達のケアをしているわけですが、そもそもなんでこんなことになったのか。マザー・テレサは素晴らしい素晴らしいって言われるけども、要はヨーロッパの宣教師として来ているわけですから、むしろこういう事態を作った加害者の側の人間です。

ですから、最終的にマザー・テレサが校長をしていたロレット・スクール、聖マリア校という所を飛び出して、路上に出るわけですが、なんとなく僕達は「素晴らしい。マザー・テレサは安定した身分を投げ打って路上に出た」という美談に語られますけども、これは自己批判です。つまり、ロレット・スクールって英語で教えてるお嬢様学校ですよ。お金があって英語で教育をさせて。送り迎え全部。召し使いが車で送り迎えするようなお嬢さん達の学校なわけ。そこに居る限り加害者としての立場に居続けなくちゃいけない。だから、マザー・テレサがそこを出たっていうのは、ある意味で懺悔だった(ような気がします)。私達がこの地域に及ぼした悪い歴史的な問題をなんとかしてバランス取らなくちゃいけないと思ったんだと思うんです。マザー・テレサ的な解決の仕方が、唯一の解決の仕方じ

やなく。つまり、学校を飛び出しちゃって、路上生活の人達のケアをするっていうマザー・テレサの働きがありましたけれども。実は、もう一つ全然別な可能性がありました。それは、ここに書いてあるロレットデイスクールシエルダっていう。うちの学生達は毎年そこに1日訪問して行くんですけども。この学校はシエルダっていう、北カルカッタのメインステーション。新大阪みたいな駅ですね。その隣にある学校です。そこに毎日。毎朝毎朝、召し使いが運転する車かなんかに乗っけられて、いい制服を着て、やって来たお嬢ちゃん達がいるわけですね。そのお嬢ちゃん達、インド人だったり外国人だったりするわけですが、ある日、はたと思ったんです。「私と同じ歳の子があんな駅で物乞いをしている。なのに私達はいい制服を着て学校に来てる。これってなんだろう」と思ったんです。インドの上流社会のお嬢さん達ですよ。彼女らが何をしたかという、クラブ活動で「路上生活の子ども達にお勉強を教える」という活動を始めました。

◆

そうしたら、その学校の校長先生が。すごくぶっ飛んだ人なんですけれども。「よっしゃ」と言って。何をしたかっていうと、1年生から10年生まであるんですけど。4年生以上の子ども達をクラスごとに、月曜日の1限目から金曜日の最後の1限までに1クラスずつ配置して、路上生活の子がいつ来てもお勉強を教える体制を作りました。生徒達が自分と同じ歳頃の生徒に勉強を教えるっていうプログラムを始めたんです。その校長先生はソーシャルワーカーを雇って、勉強しに来る子ども達の記録をちゃんと作って。その家族背景を調べて。それから、前はいつ来て、どの単元をやった、どれくらいできたかっていうことも全部チェックして。カルテ。ポートフォリオを作るようにしたんですね。その結果どういことが起こったかという、路上生活をしているどんな子でも1年たつと、その年齢相応の学力に引き上げられるっていうことが分かった。今何をやっている

かという、ズーッと路上生活の子どもに勉強を教えるのは続いているんですけども。その学年の学力に達したら、地域のカルカッタの教育委員会に申請して。この子がちゃんと学力のレベルに達していることをチェックしてもらって。ローカルな、その学校自体は英語で動いている学校ですから難しいんですけども、ベンガル語やヒンディー語で動いている学校に入れてもらう。路上生活ですから、通えなくなっちゃうかもしれないから、学校の屋上に宿舎を作って。路上生活している子が、その学校の屋上から朝ごはんを食べて学校にでかけて。帰ってきてシャワーを浴びて、そこで勉強して、ご飯を食べて寝れる施設を作りました。

もっと頑張ってたのは、「そうか。幼稚園の時に路上生活の子どもを見つければ、学校本体の英語教育に乗つけられる」っていうのが分かって。実は、700人いる学校の生徒うちの350人を路上生活の子どもをとることにしました。当然、学費は倍になるわけですけども。聞いたんですけども。シスター・シリルっていうんですけど。「シスター・シリル、そんなことして父兄から文句は出ませんでしたか」って聞いたら「いや、うちの学校、こっちに引き取ってきたから。来たくなきゃ来なくていいの」。高いお金払ってでも来たって言うてる子どもの家庭から来てもらって、2人分の学費を払ってもらって。路上生活の子どもとお金持ちの子どもが全く同じ条件で勉強できる学校を作りましたっていうプログラムを作りました。そのシスター・シリルっていう人、今カルカッタからニューデリーに呼ばれて、ニューデリー政府の文部科学省の、ホームレスの子ども達の教育のプログラムの責任者をしていますけども。これは、マザー・テレサと同じ問題意識を持って、別のやり方をした人になります。つまり、学校を飛び出してホームレスの人達をケアするっていう営みをしたマザー・テレサと、学校っていう枠の中で次の世代のホームレスを生み出さないようにシステムを作ったシスター・シリルっていう人のこと。二つがありました。でも、いずれにしろ加害者としての西洋人っていうの

が。今のインドの社会の問題にどう取り組むかっていう。これは苦労した例なんだろうと思います。

こちら辺は皆さん、「マザー・テレサ素晴らしい」って言う時にちょっと考えてみてください。そもそも、あの人がどうしてあそこにいたの？ 彼女が母体にしてた学校。20年間も勤めてた学校って誰のための学校だったの？ もちろん、大金持ちの、ホームレスの人達を足蹴にして生活してたインドの人達の子供を教育していたというわけなんですけれども。彼女らの学校がホームレスを再生産しているメカニズムの中にいるわけですから。そういう中からマザー・テレサは問題意識を感じて飛び出したんだと。だから、「素晴らしい素晴らしい」でなくて。恐らくマザー・テレサの中には罪責感がすごくあったんじゃないかなと思います。マザー・テレサを道徳の科目として使う時に、小学校じゃちょっと難しいですけども、歴史を絡めるととても面白いです。つまり、西洋がアジアを植民地支配していたっていう土壌の中で初めて起こる問題ですね。

◆  
次はもうちょっと面倒くさい。マザー・テレサの活動理念を果たして宗教を語らずに伝えることができるだろうかという話なんです。僕達は「マザー・テレサ素晴らしい。ノーベル平和賞もとったし」って言って、ちょっと中立的な、でも望ましい価値の体現者みたいに思っていますけれども。あの人は、別にソーシャルワークしていたわけじゃないんですね。彼女は単純に宗教的な修道者として仕事をしてた。どんな言い方をするかっていうと、「あのホームレスの人達はイエス様だ」って彼女は思ってたんです。だから、イエスに仕えるっていう修道女としての責任から、ホームレスの人達に仕えるっていうことをしてたので。「こんな可哀想な人達がいるから、その人達になんとかしてあげましょう」って思っていたわけじゃ全然ないんですね。だから、ある外国のジャーナリストが「マザー、あなたのやっている活動は素晴らしい。全世界にこのことを報告して基金

を集めれば、この学校をもっと拡大できます」ってオファーをしたんですね。そうしたら、マザーは「あなたはやりなさい。私は私のことをやっていくから」って。つまり、これが素晴らしい社会事業だって思って活動したい人は「どうぞおやりください」と。「でも私はそんなことやってるんじゃないんです。私は目の前にいる死んでいく人達。たった100人しか収用できない。何万人という路上生活の人がいる中で、たった100人しか収用できない施設だけれども。ここに来た人達の中に、自分の神様の子であるイエスがいていうふうに感じて、その方達にお仕えしているだけなんだから」。

その活動を果たして公立の学校の道徳の教育で、どれだけ伝えられるだろうっていうのがクエスチョンマーク。もしこれを一生懸命伝えようとすると、実は倫理の問題で広義の問題にしちゃうかもしれない。「こういうことをするのが望ましい」とか「こういうのがいい」。だけど、恐らくそれは道徳教育の本分に反する。つまり、行為を教える「こうするのがいいです」、「こういうことをやるのが望ましいことなんです」っていう、行為を奨励するための科目じゃない。むしろ、その背後にある子供達の心の向け方を大事にしているのだとしたら、行為論に貶めてはいけないだろうなと。「マザー・テレサはこんな素晴らしいことをしました。あなたもこういうふうにしましょう」っていう行為論に貶めてはいけません。だとしたらどうしよう。マザー・テレサのキリスト教信仰の話をしなきゃいけないかもしれない。してもいいと思うんですけどね。公立学校でも一定の宗教に加担するような宗教教育はしてはいけないけども、宗教の本文を色々な立場をちゃんと紹介しながら教えること自体は、恐らく文部省の方針にも叶ってるんだろうと思います。ただ、それを上手にやるのが難しいから公立学校は避けますけれどね。やっちゃいけないことではないはずなんです。マザー・テレサはケア提供者の論理を素晴らしく展開した人じゃなくて、自分の罪と向き合うっていうことを契機にケアの現場に出ていった人なんだろうと思うんですね。ここにキリスト教

的なものもあるし、さっき言った歴史の問題もあるわけで。「さあ、皆さん。これをどう料理していただきますか」っていう感じです。



こういうふうなマザー・テレサの現場に学生を連れて行くわけですけれども。まさに、マザー・テレサを模範として、行動規範を身につけるための体験学習をさせにいったわけじゃないんです。学習者。つまり、うちの大学の学生の主体的な学習課題の発見と、独自の課題への取り組みを保証し支援するだけだと。つまりどういうことかって言ったら、例えば、ホームレスの人達にお金をせがまれてビビって逃げちゃった自分みたいなことを経験するわけですね。それから、善意のつもりであげたら騙されて。つかまされた物が、なんか二束三文のを500円で買わされたみたいな経験を沢山してくるわけですね。そういうことを通して、学生達は生身で色々なことを感じてくれる。僕は「これを感じるためにここで失敗しなさい」みたいなことを言う気はさらさらないわけで。好きにやって好きに学んでっていうのが体験学習の現場なんだと思うんですけれども。だから、そういう意味でいうと、マザー・テレサを素晴らしいと思うかどうかは、学生達をインドに連れて行く時の前提ではないんです。「胡散臭っ」と思っても全然かまわない。だけれども、マザー・テレサのように自分が直面していた問題のいい面も悪い面も。それから、なんかできて良かった面も。だけど、そのこと自体が持つてる、ある種の偽善性や不十分さやなんかを全部分かったうえで、あれを続けてたっていうマザーの姿勢。それから何かしっかり学んでくれるんじゃないかなあとと思います。そういうふうな状況の中で、学生達が自己理解を深めて、責任性を高めて。人。色々な人。インドの人もそうだし、同じグループの人もそうだし。帰ってきて、同級生なんかも含めてですけども、「関係性ってなんだろう」っていうのを改めて考えてくれるっていう契機になってくれればいいなと思っています。

最後、このマザー・テレサのことを教材にすると、どんなことが返ってきちゃうのかというですね。さっき言ったみたいに、マザー・テレサは自分がケアしている人達を可哀想だと思っていたわけじゃないんですね。むしろ、自分達の歴史の負の遺産として責任を感じてたと思う。しかも、そこに「ごめんなさい」って言って、それを修正するためにやってたっていうよりも、その貧しい人・困っている人達の中にイエスの姿を見るっていうふうな、他者の中に真実を見る。「私が正しいことやってる。あんた達可哀想な人」じゃなくて、自分が向き合ってる相手側に真実を見ていくっていうことを実現したのがマザー・テレサだと思うんですけども。振り返って「おい、伊藤。お前は、このプログラムに参加している学生達を、その人の人生を、主体的に生きている大事な人格として、果たして見ているのか」。インドに連れて行く時には「お前、ちょっと態度悪いな」とか「いつも忘れ物するな」とか「時間に遅れるな」とかいう文句は言いつつも、本質的には、その人が自分の人生を真摯に行き来している他者である、人格であるっていうふうに見てるのか。マザー・テレサがあの人達に眼差しを向けたように「伊藤、お前は学生達にそういう眼差しを向けているのか」という問いかけが返ってきちゃう。それから、マザー・テレサが歴史の状況の中で苦悩して、できることを一生懸命やってっていうふうな。今を生きる大変さっていうのを学生達も感じてる。僕も感じてる。今を生きる大変さっていうのを、教育っていうなんか分かんない線路引いて、その上を走らせることにかまけて。今を生きるっていうことの大変さを、生徒も学生も、そして自分自身もちゃんと味わっているかっていうふうなことがマザー・テレサから返ってきちゃうんですね。さっき言ったように、行為論として「ああせい、こうせい」ではなくて、その元にある価値・人間性みたいなものにちゃんと目を向けてるかっていうことが返ってくる。そして、教育の現場のことを考えれば「学習者を信頼しているか」。自分がなんかをすることによって、きっかけを作るかもしれないけれども。最終的には、その学生が、その生徒が、も

しくは、路上生活をしているその人が自分の人生をしっかり歩むようになれるように、ちゃんとケアをしていることができるのか。その歩みに同伴ができていのかっていうのが問いかけてられているような気がするんですね。



マザー・テレサっていうのは本当に面倒くさい教材です。どうしてかっていうと、マザーの活動を知るっていうことを通して僕達が豊かにさせられるし、ぜひ生徒や学生達にもそれに触れて欲しいっていうふうな促しがどんどん起こってくるわけですけども。一步踏み入ると実はドロドロ。それは近代の社会が持っている歴史もドロドロかもしれないし、経済的な貧富の差の問題もドロドロかもしれない。この後も、このカルカッタの地域っていうのは何回も飢饉にあうんですね。大量の餓死者が出たりするような歴史を沢山持っています。農村部で食いつぶされた人達が、またカルカッタに流れてきて。さっきの独立の時の問題に加えて、その後の経済的な様々な困難の中で、もともともとカルカッタに人口が流れ込んできちゃうような事態があります。だから、今のところカルカッタのホームレスの問題が解消される見込みっていうのは全然ないですね。

ノーベル経済学賞をとったアマルティア・センという人がいます。10年ぐらい前に亡くなってますけども。アマルティア・センっていう経済学者がいるんですけども。彼はカルカッタの出身だったんですね。彼はケンブリッジのプロフェッサーをして、ハーバードのプロフェッサーをして。今またケンブリッジに戻ってっていう。本当に経済学の第一線で、国連の人間の安全保障っていうプロジェクトのリーダーもしていた。緒方貞子と一緒にプロジェクトリーダーをしてた人なんですけれども。彼の研究はカルカッタの飢饉の時の経済的な状況の研究なんですけれども。彼の結論は「カルカッタの大飢饉の時に全員が食べるだけの物はあった」と言うんですね。「だけど、この飢饉が起こったのは分配が間違っていたからだ」と。「あんな飢饉で人

が死ぬ必要なかったんだけど、分配が誤っていたから何万人って人が死んだ」っていう研究をしているんですね。カルカッタの問題って、まさにさっき言った歴史の問題もあるし、植民地支配の問題もあるし。今言ったような近代経済学的な問題もありますね。それから、路上生活をしている人達って戸籍もないわけだから。皆さん、小学校に生徒を迎える時って。メカニズムをご存知ですよ。小学校に行く年齢の前の年の、12月ぐらいまでに和泉市から各家庭にハガキが行くわけですよ。「あなたのお子さんは来年4月から緑ヶ丘小学校に行くことになっています。何月何日にご登校ください」と、ハガキが行くわけですけども。それは、その子が生まれた出生届に基づいて、戸籍ができていて住民票ができていますからね。ホームレスで生まれた時の記録がなかったら、義務教育なんか成り立たないです。誰がいるかを知らないんだから。生まれてから死ぬまで、公の記録に1回も載らない人達っていうのが何万というわけです。これは、インドが困った国だから起こったわけじゃなくて、ヨーロッパが支配してたから。ヨーロッパが無理やり、あんな格好での独立をさせたから。それから、経済学的な分配の問題が間違っていたから。つまり、僕達が抱えてる問題そのものが、あそこに反映してたりするわけですね。

◆

学生達はインドに行くと、「あっ。これってあの国のあの問題かと思っていたら、自分達の足元のこの問題なんだ」ということに気づく。桃山学院大学でも上智大学でも、できたらこのインドのプログラムに1年か2年で行って欲しいと思っています。学生に。1年か2年の時に行く。「えっ。俺、何を勉強しなくちゃいけないんだろう」と気づいてくれる。こんな問題が世界にある。自分もその世界の一員であるっていうのに直面した時に、「俺、遊んでいいんだろうか。この問題を抱えている世界の一員として、なんか考えなくちゃいけないんだろうか」と思って、慌てて英語を勉

強してくれる学生とか。それまであんまり勉強してなかったけども、突然ガーンと勉強しだす学生とかいます。過去10年間で、このプログラムに参加したのために、大学を卒業してから看護学校に入り直した学生が4人います。それから、全然お勉強タイプではなかったんだけど、大学院の国際経済学なんかを一生懸命やったりしてる学生もいるし。就職する企業を選ぶ時に「環境問題にちゃんとしているところしか受けません」とみたいな学生も出てきました。恐らく、このプログラムに参加した学生の大学院進学率って、他の学生よりちょっと高いんだろうなというふうに思います。

マザー・テレサの問題っていうのは「あそこであんな素晴らしいことをした人がいた」ではなくて、「私達が生きてる世界に、こんな沢山問題がある。それにどうやって取り組んだらいいかは自分で考えなくちゃいけない」ということを突きつけてくれる。しかも教育現場で働く私達には「そのことをお前は教室でどう伝えるんだ」というのが迫ってくるような気がします。マザー・テレサは面白い題材だなあと思っています。毎年、桃山が行くのは2月の後半から3月の始めにかけてです。ちょっと皆さんも、まだ学校が終わってないかなと思いますけども。なんかの機会に先生方でも一緒に来てくれればなあって思います。1年にお1人でも「桃山のプログラムと一緒にカルカッタでボランティアします」とみたいなことを市のほうが、ちょっと特別な企画として認めてくれたりしたら、大学としても大喜びだし。いっぺん行って向こうで1週間でもボランティアしてくると、ちょっと世界が変わるっていうふうな気もします。ぜひこれからも。すぐ近くですから、大学のリソースを沢山使っていただきたいと思えます。大学としても、私達が見つけたり学んだりすることを教育現場にお戻しできるように、これからも協力をさせていただきたいと思っています。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

文部科学省  
平成26年度  
総合的な教師力向上のための調査研究事業

## 「マザー・テレサの活動とは」

学習教材としての脱=偶像化と  
マザー・テレサから教師への語りかけ

伊藤高章

上野大学神学部教授・グリーンフケア研究所所長

南山学院大学ニッセイ大学  
インドサビヒスラニソングプログラム  
共同引筆者

1

## マザー・テレサ年譜1

- 1910年8月27日  
スコピエ（現マケドニア旧ユーゴスラビア共和国）生まれ。  
本名：アグネス・ゴンジャ（花のつぼみの意）
- 1928年9月15日  
アイルランドのロレット修道会に入るためにスコピエを去る（18歳）
- 1928年12月1日  
ダーズリンで修練を始めるために、インドに派遣。
- 1929年5月23日  
修道名としてテレサと改名。修練者としてダーズリンで修練を始める（19歳）。
- 1931年5月24日  
清貧・貞潔・従順の初誓願をたてる。（21歳）
- 1929年～48年  
コルカタ（カルカッタ）の聖マリア高等女学校で地理を教え何年間かは校長を務める。
- 1937年5月24日  
終生誓願をたてる。聖マリア高等女学校校長となる。
- 1946年8月16日  
暴動のため、コルカタの町は大混乱に陥る。マザー・テレサ、町に食糧を探しにでかける。

2

## マザー・テレサ年譜2

- 1946年9月10日  
黙想会に出席のため、ダーズリンに向かう汽車の中で、「美しい人々ともにもいるキリストに尽くしなさい」という神のうながしを感じ、コルカタのスラムで働く決意。  
修道会を退会し、スラムで働く許可を目上に願い、その願いは、教皇庁に送られる。
- 1948年7月末  
4月12日付の退会許可書が出る。（38歳）
- 1948年8月8日  
ロレット修道会の修道服をぬぎ、水色にふちどり、肩に十字架をつけた白いサリーを身に着けた。3か月間、バトナのアメリカン医療重教修道女会経営の「聖家族病院」で看護の集中訓練。
- 1950年10月7日  
Missionaries of Charity 「神の愛の重教善会」創立。コルカタ大司教より認可。
- 1952年  
「死を待つ人の家」開設。（42歳）
- 1953年4月12日  
神の愛の重教善会で終生誓願。

3

## マザー・テレサ年譜3

- 1965年2月1日  
「神の愛の重教善会」教皇認可を受ける
- 1975年  
「神の愛の重教善会」創立25周年を迎える。施設の数はいンド国内に61、海外に27、シスター数は千人を超える。（1,035人）。アルベルト・シュバイツァー賞受賞。
- 1979年12月10日  
ノーベル平和賞受賞。ノルウェーのオスロで記念講演。  
「私はノーベル平和賞にふさわしい者ではありません。けれど世界中の美しい人々に代わって、この名誉ある賞をいただきます。私のための受賞祝宴会はやりません。どうぞ、そのお金を貧しい人々のためにお使い下さい。」記念スピーチ賞金の19万ドルは、飢えに苦しむ人々の食料、人々から見放された孤独な人々のホームの建設資金に当てられた。
- 1997年9月9日  
永眠。9月13日コルカタで国葬が行われる。マザーハウスに埋葬。
- 2003年10月19日  
教皇ヨハネ・パウロ二世により、福者に列される。

カトリック中央協議会HP<<http://www.cbci.catholic.jp/mother/history.htm>>より

## 今日のプログラム

- 今日のプログラムの複雑な構造
  - ・ 小学校の教材研究：「マザー・テレサ」
  - ・ 大学体験学習素材としての「マザー・テレサ」
  - ・ 学生の変容の媒体としての「マザー・テレサ」
  - ・ 小学校授業教材としての「マザー・テレサ」
  - ・ プロの前で素人が話をするつもりはない
  - ・ 教材のもつ他の可能性紹介が、授業の援助に
- 大学における海外体験学習教材としてのマザー・テレサ
  - ・ 歴史学・実践神学・海外体験学習理論に照らし
- 〈マザー・テレサから教師への語りかけ〉

5



6

## 体験学習教材として

- 【歴史的チャレンジ1】時代錯誤・矮小化の排除：  
現代日本の価値教育という視点から、抽象化され美化され図式化された素材として人物像を作り上げることへの批判
- ・ 現実を生きた「他者」として、その人格の一貫性を尊重する姿勢の重要性
  - ・ 人間の現実を単純化し、人生を規範的に理解してしまう危険性
  - ・ 〈当時・現地の人々にとっての意味〉を見る視点を弱体化させ、真の「異文化理解」「他者理解」「共感力」を失わせる
  - ・ マザー・テレサの苦悩に迫る必要

7

## 体験学習教材として

- 【歴史的チャレンジ2】加害者マザー・テレサの苦悩  
マザー・テレサの活動を必要とする現実はどのような歴史の中で起こってきたのか。一般社会史の中におけるコルカタの意味を理解して初めて、より深い道徳的理解が可能になる。
- ・ ヨーロッパによるアジア植民地支配と、宗教・民族対立を利用しての英国主導のインド独立（1947年8月15日）
  - ・ ヒンドゥー・イスラムの大移動とコルカタの混乱。
  - ・ 西欧的教育制度への批判
  - ・ 課題の意味は、他のアプローチを選んだ Loreto Day School, Sealdha の取り組みの中により明確

8

## 体験学習教材として

【実践神学的チャレンジ1】中立的価値に立たない修道者  
マザー・テレサの宗教的信念を、宗教性を語らずに伝えるこ  
とができるのか？

- 宗教実践家であったマザー・テレサを、宗教的価値教育  
をせずに理解できるのか
- 〈イエスに仕える〉を、中立的に表現できるのか
- 倫理の問題を「行為論」にしてしまっているのか
- ケア提供者の論理としてではなく、人間の罪性と向き合  
う契機としてのケア現場

9

## 体験学習教材として

【体験学習理論のチャレンジ1】学習者の主体性と評価  
マザー・テレサを模範として行動規範を身につけるための体  
験学習ではない。学習者の主体的な学習課題の発見と独自  
の課題への取り組みを保証し支援する。

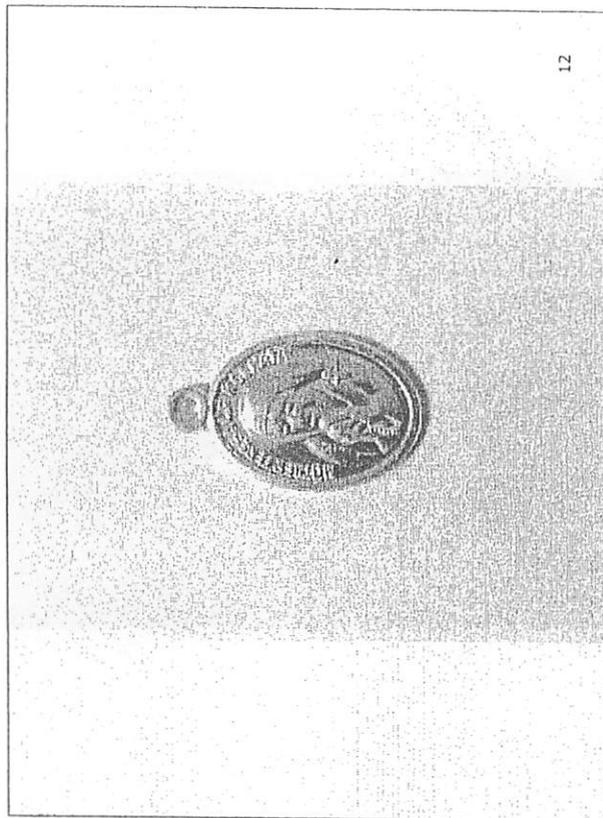
- マザー・テレサを素晴らしいと思うかどうかは、学習の  
前提ではない。
- マザー・テレサが直面していた現実を理解し、取り組み  
の「姿勢」への共感が重要
- 自己理解、責任性、関係性の向上を評価する

10

## マザー・テレサから教師への直接の語りかけ

- 学習者を、果敢的に独自の文脈を生きる「他者」として  
尊重しているか。各自の文脈を真摯に生きる支援をしてい  
るか？
- マザー・テレサが歴史的状况中で苦悩し、道を選んだよ  
うに、学習者に促しをしているか。同時に、自らも歴史状  
況との批判的取り組みを行っているか？
- 倫理・道徳を、行為論としてではなく、価値論として理  
解し教育しているか？
- 学習者の学習力を信頼し、その歩みに同伴できるか？

11



12

## 合同研修Ⅰ ～道徳資料「マザー・テレサ」を教材化～

発表： インド異文化・ボランティア体験セミナー参加学生

小杉 磨未奈 乗京 亜美 花田 大樹

[記録作成:松岡敬興]

### ◆花田

というわけで、早速いきたいんですけども。まず、僕ら実際にボランティア体験・セミナーっていうのに参加したんですけども。一人一人、それぞれ人格があるので、感じたことが全部違います。やっぱり、最初は僕らが何を感じたのかっていう感情を皆さんに紹介してから、最後に3人でまとめた。ほんとに簡単にまとめたやつなんで。あとでもっと詳しいことは、各席に僕ら一人一人が行って、話を引き出してもらえたら嬉しいなと思うんですけども。最後に少しまとめて、すぐにグループワークにいかうかなと思っています。よろしく願います。

これはタージ・マハルなんですけれども。僕らが行ったのはデリーとアーグラとバラナシとカルカッタっていうところになっています。デリーっていうのがインドの一番北のほうに、ここにあるんですけど。ここに行って、ここに2泊3日いて。電車でアーグラに移動しました。ここは1泊して、さっきのタージ・マハルを見て。次の日にバラナシに2泊3日するわけなんですけれども。ここはかなり長いんですけど。電車移動の予定だったんですが電車が来ず、急遽バスで12時間移動するっていう、そういうハプニングもありました。日本じゃありえないと思います。何時間も待たされた結果、そういう急遽みたいなこともありました。

### ◆花田

またそこからカルカッタに移動するわけなんですけど。これはもう、ちゃんと電車が来て全然問題なく行けて。このカルカッタでボランティアをする2週間。11日のプログラムっていうのを僕らは体験してきました。初めはデリーの写真なんですけど。デ

リーのインド門なんですけど。これは一番デリーの観光地。メインの観光地なんですけど。前の週か、その前の週かぐらいに、かなり遠いところなんですけどデモが起こって。それが危険やっていうことで。普段はこの真下まで行けるみたいなんですけど。主要な観光地にも入れないような。ちょっと危険なおいを当日から感じて、ちょっとピリッとしたのを今でも覚えています。2年前なんですけど。これが9人で行ったんですけど。9人で行った時の荷物。運んでくれる人がいるんですけど。ここにいるガイドの人が、安全そうな人を選んで乗せてもらうっていうことにしました。

これが電車の中ですね。普通のインドの移動しての方と相席になって話して。なんかカレーを持ってきてて、案の定。案の定って言ったらちょっと失礼なんですけど。案の定カレーを持ってきて「お前もいるか」みたいな話になって。「いや、まあ。ちょっとお腹壊すの怖いしな」と思いながら「sorry sorry」みたいな。「Thank you」言いながら2人で断りました。

これがタージ・マハル。移動してタージ・マハルに行ったところですね。タージ・マハルから少し離れた所にある川で撮った写真なんですけど。夕日がすごい綺麗で。なんでこんなに夕日が赤いのかなっていうのをちょっと調べたんですけど。分からなかったんで、気になった方、調べてください。すみません。日本よりか、だいぶ赤かったんで。なんでなんかあって思ってるんですけど。ちょっと分からなかったんで。

これは、たぶんバラナシかな。牛が沢山いるっていうのが話には聞いたことはある方もいるかと思うんですけど。実際はかなり牛は普通に歩いてて。こんな感じで歩いてますね。これがガンジス川の。聖

なる川と言われているガンジス川の近くで、ちょうどお祭りがありまして。偶然にも。いつもはこんなにはないらしいんですけど。すごい多くの人が集まっています。この後マイクも置いて、何か分からないです、シャンシヤカ鳴らしながらお経を読むみたいなお祭りもありました。で、これもまた赤い夕陽です。体洗ってます。この人、なんかヨーロッパ系の人なんですけど「お腹とか壊したりしないのかな」と。ちょっと心配になりますね。

これは、カルカッタにもう入ってるんですけども。日本語を勉強してるインド人達とも交流をさせていただいて。今でもこの中の何人かは。便利な時代で Facebook なんかでつながってるんで。1月の28日に僕はもう1回インドに行こうかなあと。卒業旅行で行こうかなあと思ってるんですけど。この中で知り合った人にも Facebook を通じて。また連絡して。向こうを案内してもらえたら嬉しいなあなんか思っています。これが力車。オートバイの後に3人乗れるやつに乗った時の写真ですね。これがカルカッタの夜の町です。人が多いですね。やっぱり。これは、さっき伊藤先生のお話にもあったんですけど、路上で生活してる人が沢山いるんですね。もうものすごい。

「もう、どんな町やねん」というのを、たぶん行ってない方やったら思われると思うんですけど。こういうイオンモールみたいな。それこそ、ララポートみたいなのもありまして。ここで。これはフードコートなんですけど。ここにはケンタッキーとかもあって。若者がワーツって騒いでたりとか、そういう一面もあったり。同じような空気でしたね。日本のああいう大きなショッピングモールなんかと。そこのギャップなんかも感じながら色々。そんな異文化体験をして、最後11日間ボランティアに行くわけなんですけれども。

#### ◆花田

先に下を紹介させてもらうんですけど。ニルマル・ヒルダイっていう施設があります。意味は清純な心っていう意味らしいんですけど。別名「死を待つ人の家」と言われてます。結核だったり、マラリ

アだったり、腸チフスだったり、肝炎だったりっていうのを患っている方が主に多くて。僕は上に行ってたんで。あとでニルマル・ヒルダイに行った、この話は聞けると思うんですけど。約、男女50人から100人っていうのがいます。そのニルマル・ヒルダイよりも少し軽い症状の人達。こういう病気じゃない人。足が片方なかったりだとか、体調不良で道に倒れてた人が運ばれてきたりとか。救急車で。そういう人達が生活をしてる場所がプレムダンっていう所になります。愛の贈り物という意味だそうです。このあとまだ写真が続くんですけど。

朝、マザーハウス。マザー・テレサが今も石の棺の中に眠っているっていう所に、みんなが7時頃に集まって。そこでバナナとパンとチャイをいただけるんですけど。朝食で。それだけいただいたら、こういうプラカードっていうの。ほんとにこんな紙をダンボールに貼って、こうやって「プレムダン行く人こっちですよ」といって。これも一緒に行った子なんですけど。集まったら歩いて向かっていく。ニルマル・ヒルダイの人は近くのバス停に行って、バスに乗ってニルマル・ヒルダイに向かうっていう感じですね。ボランティア初日なんかは、もうこれに付いて行くのが必死なんですけど。1週間たったら、僕らがこれを持って「集まってよ」とか言って。道も覚えてるんで、先頭立ってさっさかさっさか歩いていって。スペイン人の女の人に「もうあなたがリーダね」とみたいな冗談も言われたりとかしながら。結構なんか馴染んできたなあなんて思ってたのもあります。これが実際の。先にプレムダンの紹介をさせてもらうんですけど。プレムダンの中の様子です。男性と女性で施設がひっついてるんですけど分かれていて。女性はもちろん女性のほうだけ。男性は男性のほうだけを担当してたんで。ちょっとプレムダンに行った女の子がいるんで、中身の説明をお願いします。

#### ◆小杉

私はプレムダンの女性の方の所に行かせていただきました。主な1日の流れなんですけど。私達がボ

ランティアした時間っていうのが 8 時から大体昼の 12 時くらいで。朝、施設に着いたら大量に洗濯物が置いてあって。それを洗ったり。あと、利用者さんとかが結構外でひなたぼっこしてたりしてたんで、そこで喋りかけたりっていう。別に仕事内容は全然決まなくて、自分が行きたい所に行くっていう感じで。何も指示がないので。本当に自分で自らかないと何も。仕事しなくてボーッとしてるのも大丈夫だしっていう。そのような流れになってました。

これは外でお話してる様子の写真です。結構自由な感じで。外で編み物してたり。女性の方、すごいおしゃれが好きなので「マニキュアとか塗って」とか言って。で、塗らせてもらったりとか。あと、爪とかすごい伸びてる方が多いので爪を切ったりっていう。私達も他人の爪を切るとか、他人の人にご飯をあげるっていうのが初めてなことばかりで。そういう体験をさせていただきました。

これは学習室みたいな所があって。そこで自由に絵を描いたりとか編み物をしたり、折り紙を折ったりしました。私も日本人ってことで何かできないかなと思って。折り紙がすごい沢山あったので、鶴を折ることだったらできるかなと思って。言葉は全然通じなかったんですけど、鶴を折って。日本ってこういうのをみんな折ったりするんですよっていうことを伝えたりしました。私自身、最初入った時に、目が飛び出てる人だったり、目がもう潰れててなかった人だったり、そういう人を目の前で実際見て。なんかすごい避けてしまった自分がいて。なんかそれって。「なんで避けてんやろう」って。勝手に自然に避けてたんですよ。それって自分の中で。今までだったらそういうこと感じなかったんですけど。避けてる自分が嫌になったり。そういう自分の嫌な面がインドに行って浮き彫りに出てきたなっていうのをすごく感じました。やっぱり、相手の立場とか考えたり。もし自分が目がなくてというか、そういう人の立場に立った時に、自分だったら絶対嫌だなあっていうのをすごく感じて。インドのこのボランティアをしたことがきっかけで、自分自身をもっと見つめ直さないといけないなっていうのをすごく感

じさせていただきました。では男子のほうをお願いします。

#### ◆花田

ここが女性のスペースになってて、奥に入ってくると男性のスペースになってます。男性のほうも朝行ったら、やっぱり洗濯物が山のようにあって。この上に干して。それが終わると水をあげたり。ご飯の時間だったらご飯をあげたりっていうふうになってます。彼らはひなたぼっこじゃないんですけど。中は暑いんで、外の陰の所にいつもこうやって椅子を置いてボーッと。本当にボーッとしてますよね。ボーッとただしているっていう。そんな感じですね。彼は右足がなくて、いつも松葉杖かこの椅子を使ってる。この黒のおじさんは、さっき目が見えてないって言ってたんですけど、ずっと目を閉じてて。全く目が見えてない状況で。そういう方でした。彼も右足がないんですけど。こんな感じで和気あいあいとやってましたね。さっきの休み時間が。クッキータイムってあったんですけど。くだけた書き方になって思った方おられるかもしれないんですけど。お昼ごはん。おやつ時間があまして。ここの施設に。プレミアムには。そこもクッキータイムって呼ばれてたんで、ちょっとこれはあえてなのかなと後ろ見ながら思っていました。

これは中の様子なんですけど。左の方は脳梗塞で倒れて左半身が動かないって言って、もうずっと手が握られてた状態。で、中が垢だらけだったんで、頑張って開いてちょっとでも拭くっていうのを毎日やってました。彼は日本が好きみたいで、僕が「JAPAN から来た」っていうふうに言ったら「オオ、ニッポン、ニッポン」って、僕のあだ名がニッポンになっちゃいました。

タクシーでプレミアムからは帰るんですが、その時の様子ですね。あんまり車の交通量。今、赤で止まっているんで多くないんですけど。どンドン通ってて、ちょっとつかまえるのにも一苦労っていう感じですね。プレムの前の光景です。世界中の人達との交流もしながら現地の人達にボランティ

アをしていくっていう、そういう活動をしていました。ここからがニルマル・ヒルダイの活動です。

#### ◆乗京

ニルマル・ヒルダイに行くまでにバスで移動するんですけど。初日はプラカードを持って人が連れてってくれるんですけども。それに付いて行くのに必死で。バスの時間とかもなくて、来たら乗るって感じなんです。バスも最後まで人が乗ったから動くとかではなくて、ずっともう動いてるんですよ。それを「ちょっと待って」って言いながら追いかけてバスに乗るって感じで。初日は怖すぎて。バスが。降りる時もタイミングが分からなくて。一緒に行く他のところから来た人とかに付いて行ってなんとか行けたって感じで。1日はバスが怖かったなっていうのでいっぱいだったのを今でも覚えています。

私が行った所は、すごい重い病気の方が多くて。一応ボランティアのカードがあって。最終日には中で写真を撮ってもいいっていう許可が降りるんですけども。私が行った施設は「重い病気の方ばかりなので絶対に写真は駄目」って言われてたので、中の写真は一切ないんですけど。さっきの二人が明るく微笑んでた感じの。部屋の中も明るい感じとは全く別で。こっちは結構暗くて、どよーんとした感じでした。それをボランティアの人らが、すごく明るく歌を歌ったり、みんなで歩いて踊ったりとかしてるのが、すごい印象的でした。あと、仕事内容としては全く一緒に。午前中でご飯を食べさせてあげるのを手伝ったりとか、そのお皿を洗ったり洗濯物して上まで干しに行ったりとかなんですけど。こっちは結構外とかにも出れなくて。ひなたぼっこもできなくて。どっちかって言ったら閉鎖的というか。中で1日を過ごすっていう感じで。お絵かきとかも、そんなしなかったし。マッサージしたりだとか、あと利用者さんの爪を切ったりだとか、お薬を塗ってあげたりだとかで午前中は終わったんですけど。私がびっくりしたのが、利用者さんの爪を切ってたんですね。で、言った通り、人の爪を切ることなんて初めてやし。「もし中の身を切ってしまったらどうし

よう」と思って、ちょっと遠慮気味に切ったら、すごい嫌な顔をされて。それを見てたシスターが「なんかもっとちゃんと切って」みたいな感じで怒られて。「すみません」って感じやったんですけど。その時、私普通に素手で切ってたんですね。その時に手袋を渡されて「手袋して」って言われて。逆に手袋をしたら失礼にあたるんじゃないかなって思ったんですけど。あとあと理由を聞いたら手にも水虫があるらしくて。爪を切ることによって、その水虫が私にもうつってしまうからっていうことをあとから知って、「なるほどな」って思ったんですけど。

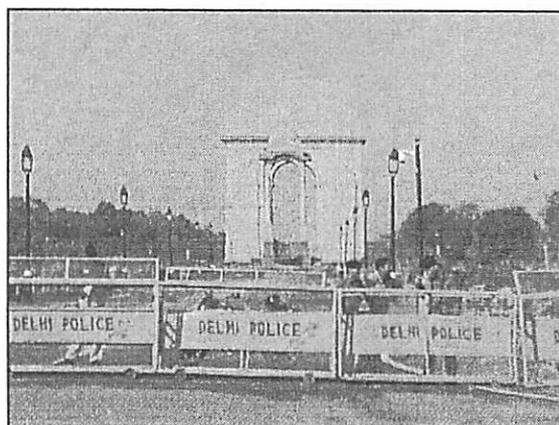
そんな感じで。結構日本の大学生、広島の子なんですけど、とかいてたり。あと、真ん中の舌出してる人はバックパッカーで、日本には1年ぐらい帰ってないみたいな言ってる人とかいたり。結構日本の人もいてたなあっていう印象を受けました。それで、ご飯を食べて食器を洗っていくんですけど。水も節約としてブースごとに分かれてて。ここではお米を洗い流して、こっちは洗剤つけて洗って、こっちは洗剤つけたやつを流して拭いてっていう。各ブースに分かれてる時に「私もやります」って言って私が磨いてたんですけど。なんかそれを他の人が「日本人は遅い」みたいに言われて。「なんでやろう」と思ったら「すごい丁寧すぎるよね」みたいなこと言われて。「あっ、お国柄なんかな」とか思ったりもしたこともありました。逆に他の。それはたまたま中国の方だったんですけど。洗剤を、こんなケースに入ってるんですけど、1個ガサッって使って。それを周りの人が「あの人何？」みたいな感じで言ってたのも、ちょっと面白いなとか思ったりもしました。そんな感じです。

最後、インドで感じ取ったことなんですけど。「自分の世界の狭さを知った。何も知らない自分が見えた。自分を大切にしたいなと感じた。外国に目を向けるきっかけになった。日本の常識は外国の非常識ともなることがある」ということです。私達の経験から伝えたいことは、「発見から行動へ。つながることの大切さ。無関心の怖さ。もっと自分を知らう」です。

## インド異文化・ ボランティア体験セミナー

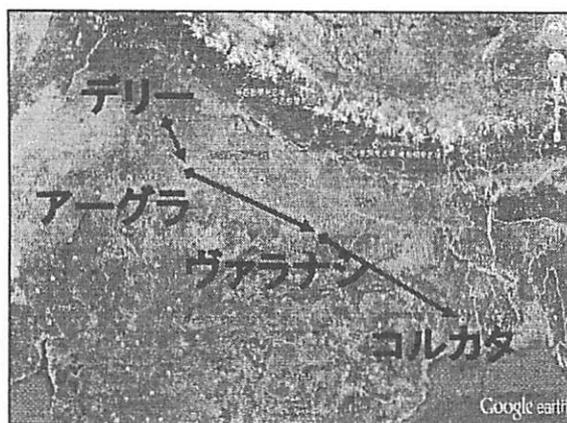


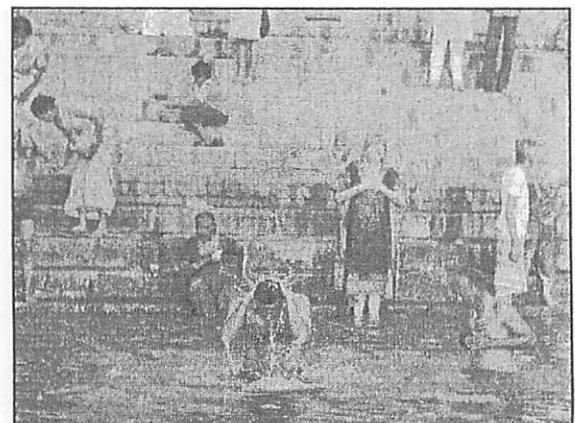
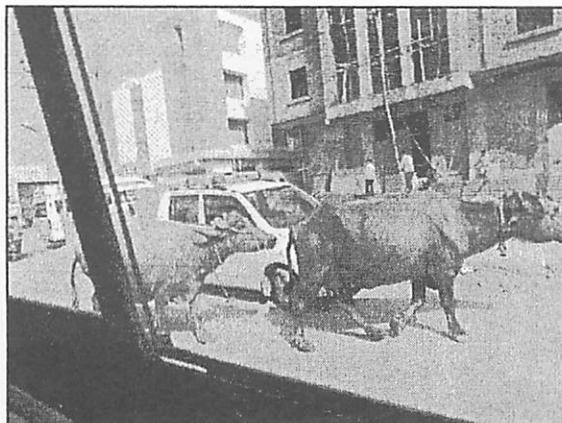
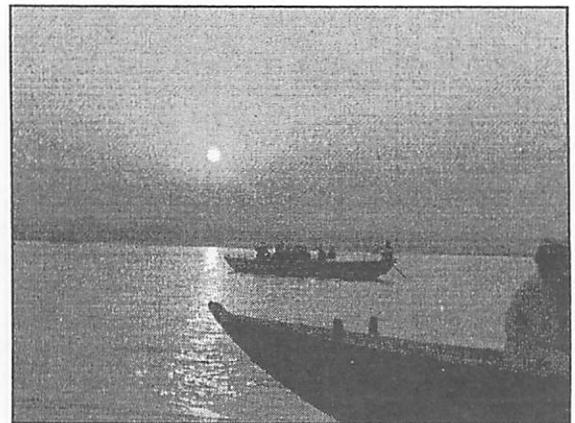
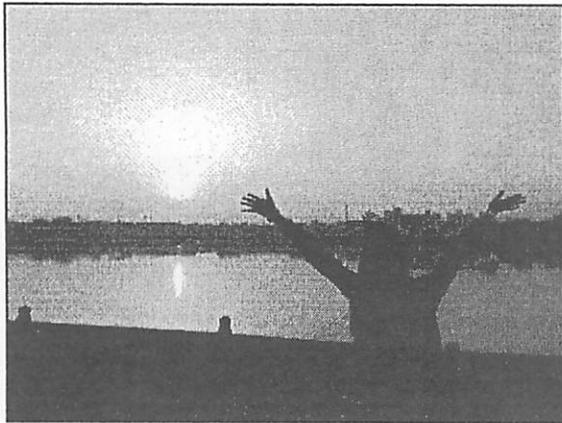
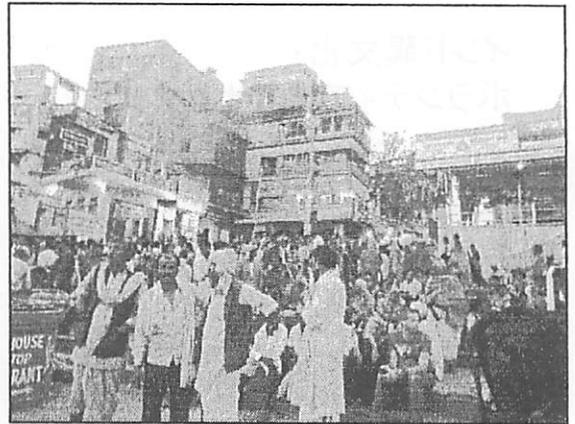
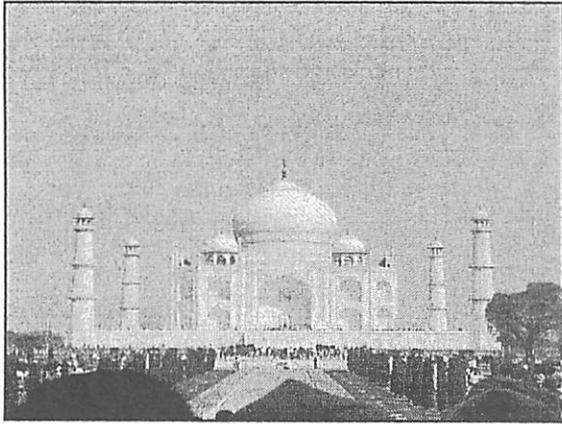
【cvINDIA13】  
2013/0222-0314

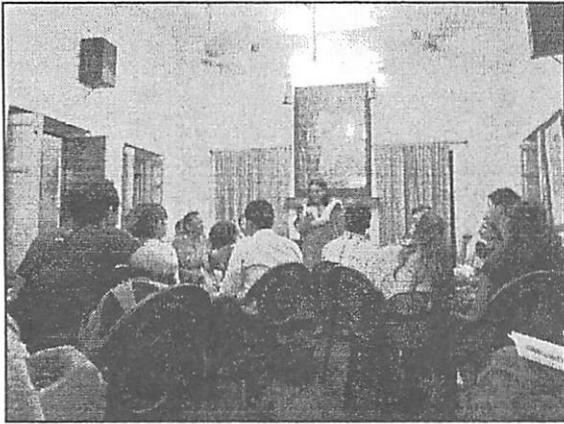


## 異文化体験！

- ▶ デリー
- ▶ アーグラ
- ▶ ヴァラナシ
- ▶ コルカタ







## ボランティア！

- ▶ PREM DAM...(愛と贈り物)  
NIRMAL HRIDAYより軽い症状の男女各50人。
- ▶ NIRMAL HRIDAY...(清純な心)  
別名「死を待つ人の家」。結核、マラリア、腸チフス、  
肝炎などの男女50~100人。

